

心外膜や心筋に転移するもので、心腔内に発育してくるものは報告が少ない。この度、右心房腔内に発育転移した悪性腫瘍を3例経験したので報告する。

症例1は、77才女性で1990年7月に肝細胞癌のため入院した。肝細胞癌は肝左葉から左肝静脈にかけて存在し、右心房内にも7×6×3.5cm大の腫瘍血栓が認められた。しかし、左肝静脈の腫瘍と右心房内の腫瘍は連続しておらず、珍しい血行性転移と考えられた。症例2は、57才男性で1991年9月に右腎癌の手術を受けた。腫瘍は右腎静脈、下大静脈、右心房まで連続して腫瘍血栓を形成しており、右腎と腫瘍血栓を全摘しえた。今日まで再発はなく元気に通院中である。症例3は、54才男性で現在入院中である。肝細胞癌が肝右葉にあり、肝静脈、下大静脈、右心房と連続性に腫瘍が発育している。

4) Normal sized ovary carcinoma syndrome の3症例

荒川 正人・柳瀬 徹
花岡 仁一・竹内 裕 (新潟市民病院)
徳永 昭輝 (産婦人科)

婦人科領域で癌性腹膜炎をきたす代表的疾患として卵巢癌があげられるが、腹腔内に広範な播種性病変を認めながら卵巢は正常大で、他に明らかな原発巣を認めない疾患群は Normal sized ovary carcinoma syndrome と呼ばれ、原発性卵巢癌の他、転移性癌、性腺外発生の表層上皮性腫瘍、悪性中皮腫が含まれる。今回我々は、本症候群の3症例を経験した。3症例は、いずれも腹部膨満を主訴に当院受診し、卵巢腫瘍は認めなかったものの、癌性腹膜炎の診断で試験開腹術を施行した。病理診断は、1例が Serous surface papillary carcinoma、1例は卵巢原発移行上皮癌であり、1例は転移性癌が疑われたが原発巣の同定には到らなかった。3例とも両側付属器切除および術後、CDDP を中心とした多剤併用療法を施行した。本講演では、本症の診断上の問題点を中心に若干の文献的考察を交えて報告する。

5) 婦人科腫瘍患者の貧血改善に対するエリスロポイエチンの有用性の検討

吉谷 徳夫・倉田 仁 (新潟大学産科)
児玉 省二・田中 憲 (婦人科学教室)

悪性腫瘍患者に対する化学療法や放射線療法は、しばしば貧血の原因となり、輸血を必要とする症例も少なく

ない。今回我々は、入院加療中の婦人科腫瘍患者における貧血に対し、エリスロポイエチン (HPO) 投与を試み、その有用性・安全性について検討した。化学療法や放射線療法に伴い、2週間以上にわたりヘモグロビン (Hb) 値 (g/dl) が9以下の貧血を呈する婦人科腫瘍患者6例に対し、遺伝子組換えヒト HPO (rHuHPO) 6,000単位を週2回皮下注した。rHuHPO 投与により、週当り Hb 値は 0.53 ± 0.27 、Ht 値は 1.7 ± 0.95 (%) 増加した。本剤長期投与により、化学療法を反復施行した症例においても、Hb 値は増加傾向を示した。副作用 (血圧上昇、頭痛、血栓症など) は認めなかった。rHuHPO の投与により、化学療法や放射線療法に伴う貧血の改善が期待され、治療遂行・輸血回避の観点から本剤は有用と判断された。

6) 未変化体シスプラチン (CDDP) 体内動態の検討

小柴 庸一・長井 春樹
高橋 春樹・加藤 克彦
高橋久美子・渡辺 薫
岸 とし・大筋 彰 (県立がんセンター)
星野 宏司・五十嵐 保 (新潟病院薬剤部)
横山 晶・木滑 孝一
加藤 俊幸・栗田 雄三 (同 内科)
永井 尚美・緒方 宏泰 (明治薬科大学 薬剤学)

これまで CDDP 体内動態については、濾過性白金 (フリー体) に関する報告が多かった。最近、濾過性白金からアミノ酸等に結合した低分子負荷体を除いた CDDP そのもの (未変化体) を測定する方法が確立され体内動態についても研究されるようになった。未変化体の体内動態は、濾過性白金とは異なり、また抗腫瘍効果と毒性発現に関与するのは未変化体であることも明らかになりつつある。そこで我々は、点滴静注時の未変化体の体内動態について統計的手法により解析し、至適投与法について検討した。

32症例に、CDDP を2または4時間かけて点滴静注し経時的に採血を行い、HPLC-Post Column 誘導体化法により未変化体濃度を測定した。血中濃度データと各種臨床検査値等の要因を同時に解析可能なコンピュータプログラム NONMEM を用いて解析した。

解析の結果、CDDP クリアランスが点滴速度と有意な関係が認められ、この関係にもとづき新たな至適投与法の可能性が示唆された。さらに腹腔内投与についても検討中である。